

賀川豊彦と東京帝国大学セツルメント

Toyohiko Kagawa and Tokyo Imperial University Settlement

藤沢 真理子

Mariko Fujisawa

愛知東邦大学人間健康学部

1923（大正12）年9月1日関東大地震が起こった時、当時神戸のスラム街で活動していた賀川豊彦はすぐに東京に駆け付け、被災地支援に当たる。また、東京帝国大学セツルメント（以後帝大セツルメント）を設立することになる学生たちは大学や上野の避難者救援にあたる。その活動が落ち着いた頃、帝国大学の末広庵太郎教授が学生代表に対して、賀川豊彦が学生たちに活動を続けてほしいと言っていることを伝える。一度は断るが、再び末広教授から依頼され、学生たちはトインビーホールのようなセツルメントを始めることを決意する。本稿では、賀川豊彦の復興支援と帝大セツルメントの支援活動を詳しく比較検討し、それぞれの活動の特徴を分析するとともに、帝大セツルメントは1938年に解散しているが、賀川の復興支援が現在まで100年近く続いている理由を明らかにする。

はじめに

1923（大正12）年9月1日に起こった関東大地震は、東京と神奈川を中心に甚大な被害を与えた。当時は、テレビもラジオもなかった時代であり、神戸のスラム街で活動していた賀川豊彦が地震のことを知ったのは9月2日の朝刊である。賀川は、すぐに神戸のYMCAやキリスト教会員達と集まり、その日の夕方に神戸を出発し横浜へ向かう山城丸に飛び乗った。翌日3日横浜港に到着したが、地震によって横浜港は大きな被害を受け接岸することができず、その晩、船で過ごす。翌4日に横浜から東京へ向かった。賀川は東京の明治学院神学予科で2年間勉強していたので、その夜は明治学院の友人の家に泊まり、次の日から被災地の状況や必要な物資について調査した。そして、神戸の仲間一刻も早くこの惨状を伝えるために、6日東京から横浜へ、そして清水港行きの船に乗り、翌日の7日清水から鉄道で神戸へもどった。その後、賀川は支援のため

に資金が必要と考え、西日本各地で講演し、資金を集め、必要な物資を購入し、再び東京へ向かう。

一方、帝大セツルメントを設立することとなる学生たちは、南洋諸島視察から船で日本へもどる途中、地震のニュースを聞いた。9月1日、船は東京近くにいたが、接岸することができず、翌日上陸する。学生たちはすぐに大学へもどると、大学構内に多くの人が避難していた。早速、支援活動を始めた。大学内の被災者支援が落ち着いてきた頃、穂積重遠教授から上野の山に多くの人が避難しており、そこは無秩序で衛生状態も悪化していることを聞く。そこで、学生たちは上野において被災者支援を始める。この支援も落ち着いた頃、学生と共に活動していた末広庵太郎教授が「賀川豊彦さんがこれから冬になるので、学生に活動を続けてもらいたいと言っている」と学生代表の石島治志に伝える。石島は三学期になるのでそろそろ大学へもどろうと思っていると答える。三日ほど後に再び末広教授から「やってほしい」と言われ、学生たちは支援継続を決める。そして、どうせやるのであれば、一時的なものではなく、イギリスのオックスフォード大学の学生たちが始めたトインビーホールのようなセツルメントにしたいと考えた。セツルメントとは、貧しい地域に社会改良家が住み込んで人々の生活改善を目指すものである。

1923（大正12）年9月19日から賀川は本所松倉町でセツルメントを始めた。本所松倉町で始めた理由について賀川は「もと婦人矯風會の外人部が經營してゐた興望館跡にバラックを建て、隅田川依東の防貧事業に努力し出した」と書いている¹⁾。賀川は1909（明治42）年、一人で神戸のスラム街に住み込み活動を始めた。1923（大正12）年関東大地震の惨状に衝撃を受け、賀川は拠点を東京へ移し、神戸と同じようなセツルメントを本所松倉町で始める。賀川の復興支援は関東大震災から100年近く経過した現在でも継続している点に特徴がある。

一方、帝大セツルメントは労働運動の激化により警察から目を付けられており、第1代主事の石島治志は「大正十四年、私が主事になって間もなく、特高が四人来て、責任者に面会したいとのこと。応接に出るとセツルの事業、特に労働学校について聞きたいと言いました。そこで学内及び上野での避難民救済活動などを述べ、特に上野の活動に対しては、警視總監から一任するとの一札があったことなど言いそえました。そしてこの私共の活動を見て、賀川豊彦氏などからの強い要請があってセツル事業に進展したこと、労働学校については、私ら国立大学の学生は国民の税のお蔭で、僅かな学費で最高の教育を受けている、これを思い大学で受けた智識をお裾分けしなければと労働学校を設立した、法律相談も医療もこのお裾分けの精神からですと言いましたら、判ったと言って直立不動、挙手の敬礼をして帰って行きました。セツルがこんな敬礼を受けたのは後にも先にもないことでした。」と記している²⁾。セツルメント開設当初から活動は順調であったが、日本が戦争に突入し、特に日中戦争の後、国家統制が強まり、国家総動員法が制定された1938（昭和13）年、帝大セツルメントは自発的閉鎖を内務・文部両当局や警視庁に通告し、14年の活動は終了した。

本稿では、賀川の復興支援と帝大セツルメントの支援活動を比較検討することで、両者の活動の特徴を分析し、また、なぜ賀川豊彦の復興支援は100年近く続いているのか、その理由を明らかにすることを目的とする。研究方法としては、両者の活動報告書、それぞれの活動に取り組ん

だ人々の手記や日記、論文、帝国大学新聞等を中心に分析していく。賀川の復興支援や帝大セツルメントの活動についてはそれぞれ多くの著作や記録が残っているが、賀川と帝大セツルメントの関係については、前述した末広教授が賀川の言葉「帝大生に支援を続けてほしい」を学生に伝えセツルメント結成につながったことが知られているだけである。本稿では、両者の関係や特徴を詳しく分析するとともに、賀川の復興支援が100年続いている理由を明らかにしていきたい。

第1章 関東大震災とは

1. 関東大震災とは

まず、関東大震災を引き起こした地震について振り返っておきたい。

1923（大正12）年9月1日11時58分、大正関東大地震が発生した。地震のマグニチュードは7.9で強い揺れが街を襲い、その後、大規模火災が起こる。『横綱町公園～東京都慰霊堂・復興記念館』によれば、「本所・被服廠跡の惨状は有名で焼死者三八、〇〇〇余人」と記されている³⁾。この大規模火災の状況を詳しく見てみると、「東京市では、地震発生直後から火災が発生し、9月3日午前10時までの延々46時間にわたって延焼した。建物の棟数で見ると、地震前の1922（大正11）年には35万7千棟（35万6,975棟）あったが、震災によって実に21万9千棟（21万9,012棟）が焼失した。焼失面積は、当時の市域面積79.4km²の43.6%にのぼる34.7km²にも達している。区別では、日本橋区100%、浅草区96%をはじめとして、本所区、神田区、京橋区、深川区などではほとんどの市街地が焼失してしまった⁴⁾とある。本稿で対象とする賀川豊彦の震災支援活動も帝大セツルメントも本所区で実施されており、ほとんどの建物が焼失した場所である。

この地震による被害者数は様々な資料によって異なるが、ここでは中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会『1923関東大震災報告書 第1編』よりその被害状況をまとめておきたい。死者数は、東京府70,387人、神奈川県32,838人、千葉県1,346人、静岡県444人、埼玉県343人、山梨県22人、茨城県5人で合計105,385人である。東京府の中でも、東京市の死者数は68,660人であり、その死因は火災によるものが65,902人、住家全潰によるものが2,758人である。また、神奈川県の中では、横浜市において火災による死者数が24,646人、住家全潰による死者数が1,977人で、合計26,623人であった⁵⁾。

一般的に、この地震では東京で多くの人が焼死し、横浜で建物家屋の倒壊による圧死が多かったと考えられているが、統計からは、東京も神奈川も火災による死亡が9割以上を示している。また関東地震が直下型地震と思っている人も多いが、これはプレート境界型地震であること、津波の発生や津波で死亡した人もいる。

賀川は「関東地方の被害区域は一府六縣に亘り、その被害世帯数は五十九萬二千二百六十四戸、その人口二百七十四萬人に達したのであつた。東京市に於て總人口の七割四分が、その住宅を失つた。」⁶⁾と被害について記しているが、この数字は当時発表されていたものである。

第2章 時系列でみる、賀川豊彦の復興支援と帝大セツルメントの支援活動

関東地震が起こった後、賀川豊彦の復興支援と帝大セツルメントの活動がどのように展開していったのか、時系列で見ていきたい。

1923（大正12）年9月1日 11時58分、マグニチュード7.9の関東大地震が起こる。

1923（大正12）年9月2日

① 賀川豊彦

賀川が関東地震について知ったのは、地震の翌日、9月2日であった。「当時はラジオもテレビもなかった。関東一帯は電信も電話も不通になった。いくつかの大きな新聞社は焼失を免れたが、機械が動かず、その日は活動不能に陥り、大震災の実情が大阪の報道機関に達したのは一日夜であった⁷⁾。」賀川はその日の様子を次のように記している。「九月二日の朝刊をみた私は その朝同志に檄を飛ばして その日の正午に神戸山手の青年會館に集まり 關東救援の協議を遂げ 私と福音教會の佐藤君の二人は その日の午後四時に出る救援船山城丸に便乗することになった⁸⁾。」神戸を離れる前、賀川は「はる子（筆者注：妻のハルは春子、はる子、ハルなどの呼び名がある）に、被害地では布團と衣類と金がすぐにいることだから、それを集めておくやうにと いひおいた。はる子は、純基を背にくくりつけ、佐藤一郎と一緒に荷車をひいて、下町から山手 にかけて、布團や衣類の寄附をもとめてあるいた⁹⁾。」当時の様子について、賀川ハル史料集に次のような記事が掲載されている。「賀川春子夫人は早朝よりイエス団に来られ、災害地に送るべき衣類を整理してられる。皆で山手方面へ出かけ、衣類を恵まれるよう軒別に頼んで歩く。宏 壮な邸宅に住む人達の冷淡さ、時に寺田君ら熱心党の反感をそそる¹⁰⁾」と書かれており、ハルたちが苦労して布團や衣類を集めていた様子がわかる。

② 帝大セツルメント

東京帝国大学の学生たち38人は、6月半ばから軍艦神威に乗り、当時委任統治領であった南洋 諸島を巡り視察していた。後に、帝大セツルメントの第1代主事となる石島治志（旧姓：内村） は「八丈島の沖に差しかった時、『本日正午東京、横浜に大地震あり、全市大火災、近海航行 の艦船は全速力で軍港に帰れ』との無電がありました。翌二日軍港に着きましたが、港内は油の 流出で火の海、已むなく素手のまま駆逐艦に移乗して、午後四時ごろ芝浦岸壁に到着、焼野の街 を急ぎに急いで東大に着きました。」と記している¹¹⁾。

1923（大正12）年9月3日

① 賀川豊彦

9月3日について、賀川は「正午に 船は御前崎の真正面を急行してゐた。そしてその日の午後 四時頃大島を見て通つた。大島は爆發も何もして居らなかつた。船は午後八時半頃横須賀の火 焰を見乍ら横濱に入港したが 港内からは何の消息もなかつた。たゞ（原著は点あり）軍艦のサ

一チライトと コレア丸の發火信號が急がしく瞬きして居るのを見ただけだった。(中略) 船は遂にその夜何等の消息を港内から得ることなくして港外に碇泊した」と記している¹²⁾。この日、船は横浜港へ接岸できず、船内で一夜を過ごす。

② 帝大セツルメント

前日大学へ戻った学生たちは大学に避難していた住民たちを支援し始める。石島治志は「ただちに大学に駆けつけ学内の警備に当りましたが、学内にはすでに二千の避難民が避難して来ておりましたので、その方の救済にも取りかかりました。」と述べている¹³⁾。

1923 (大正12) 年 9 月 4 日

① 賀川豊彦

9月4日、賀川は横浜に上陸した。どの建物も焼失し、火災は続いていた。最初に、賀川は徒歩で、そして東神奈川から品川行の列車に乗った。その後、賀川が若い頃勉強した明治学院へ歩いていった。「私の友人でダンテの研究者である中山昌樹君の家を叩いてみた。そして同君の一家族が避難もしないでそこに居ることを発見した。」と記している¹⁴⁾。その夜、中山氏の家に泊まった。

② 帝大セツルメント

学生たちは大学内で救援活動を続けている。

1923 (大正12) 年 9 月 5 日

① 賀川豊彦

5日、賀川は被災地に出かけ、東京市臨時災害救済事務の当局者に会う。「米は十分だが 金その他の物資が不足して居る。殊に秋に向つてゐるので古着などが大に欲しい」と言う話を聞く¹⁵⁾。また、賀川は東京YMCAを訪問している。日本YMCA史には「9月5日、神戸から迎えた賀川豊彦の指導によってさらにこの救護活動は大きく展開された。総務部、天幕部、配給品部、宗教部、収容部、避難民輸送部、教育部などの組織を整えて、その救護事業参加者も320名以上の多数に上るようになった」と記されている¹⁶⁾。賀川はその後各地を視察し、「上野の高臺に立つて 浅草 本所 深川の方面を見ると それは誠に怖ろしい光景であつた。焼かれた屍が三々五々 そこからあたりに散らかつてゐる浅草から吉原あたりまでは焦土の平原に化してゐる。」と記している¹⁷⁾。この悲惨な状況を神戸の仲間に一刻も早く知らせたいと思つたが、列車が込み合い、乗ることができず、その夜も明治学院で泊まった。

② 帝大セツルメント

学生たちは大学内で救援活動を続けている。

1923（大正12）年9月6日

① 賀川豊彦

賀川は品川まで歩き、品川から東神奈川まで列車に乗った。そこで静岡県清水行の船に乗り、清水に到着したのは翌日だった¹⁸⁾。

② 帝大セツルメント

石島治志は、「九月六日には末広先生が、二三日して穂積先生が来られ、私らの救援活動を指導されることになりました。また罹災者情報局を設け、穂積先生が先頭に立たれ」と記している¹⁹⁾。

1923（大正12）年9月7日

① 賀川豊彦

朝9時に賀川は清水港へ到着した。その後神戸まで列車に乗り、同日神戸にもどった。賀川は神戸にもどってから2日間ほど、眠ることができなかった。東京でみた悲惨な光景を思い出すからである。「あゝ Mも死んだ。Sも死んだ。誰れもやられた²⁰⁾。」

② 帝大セツルメント

学生たちは大学内で救援活動を続けている。

1923（大正12）年9月から10月にかけて

① 賀川豊彦

9月から10月にかけて、約1カ月間、賀川は救援募金を行った。「キリスト教の救護團に金が一文も無いことを知ったので 直に神戸に引返して来た。そして約四十回の講演會に七千五百圓近くの入場料と席上義捐金を得て それを東京に送ったが 私は十月五日 神戸に帰り 七日また東京に向つて出發した²¹⁾。」7500円は現在の価値で3千万円相当と考えられる。西日本各地で開催された講演會について、元徳島大学工学部長の石黒美種（1923年当時、熊本の五高生）は賀川の「関東大震災の難民救済資金募集のための講演」が開催されるというので福岡の九州大学まで駆けつけたところ、会場は満員だったという²²⁾。自伝的小説『死線を越えて』がベストセラーとなっていた賀川豊彦は全国で知られる存在になっており、多くの資金を集めることができた。

② 帝大セツルメント

大学構内の救援が一応落ち着いた9月20日ごろ、「上野の山には一万の避難民がおるが、全く無秩序で、それに黄金の山と化して非常に不衛生な状態である。これも救済しようじゃないかとの穂積先生の提案がございましたので、一同勇躍して救済班のうちから二十名位、それに一高の生徒も参加してシャベルを担いで行きました。」と石島治志は述べている²³⁾。また、各県からの救援物資が竹ノ台美術館前の広場に置かれるや否や、被災者が我先に奪い合い、公平に配ることができなかったのも、末広教授に頼み、上野の山の救済をすべて東大学生救護班に委任する警視總監からの一札をもらったことや、上野の山を十五の自治区に分け、各区に区長、委員、少年伝

令などを選び、分配だけでなく風紀衛生に及ぶ自治制を実施したことを石島は記している²³⁾。

帝大セツルメントの活動で何度も名前が出てくるのが末広巖太郎教授と穂積重遠教授である。福島正夫は二人のことを次のように記している。「帝大セツルメントで両先生と共に働らいた学生たちは、むろん博士とはいわず、先生ともいうことは少なく、普通『穂積さん』『末広さん』と『さん』づけでよび、それどころか末広博士に至っては、しばしば『ガンチャン』と愛称でよばれた。(中略)末広博士は吉野博士と共に法学界における大正デモクラシーの代表格であり、学問のなかでは理論と社会的実態を結びつけ、また学問の外では、権力、官僚とたたかい、学者を社会民衆と直接にぶつけられることを宿願とし、かつ精力的に遂行された。この意味で、大学拡張運動(ユニバーシティ・エクステンション)の実現である帝大セツルメントは、博士のとられた学問的方法とも一致する。(中略)穂積博士は、明治民法典の起草者で、後に枢密院議長となった穂積陳重博士を父とし、渋沢栄一を祖父とする屈指の名門の出でありながら、やはり大正デモクラシーの子であり民衆を友とされた。」²⁴⁾この二人の教授の支援があったからこそ、帝大セツルメントは創設、発展していく。

1923(大正12)年10月

① 賀川豊彦

10月7日、再び賀川は東京に向かう。「内務省 東京府 東京市を各々訪問して蒲團に対する用意が不十分であることを知った。それで 私は直に十月十四日 神戸に引返し 大阪朝日新聞社後援の全關西婦人聯合大會に 蒲團の缺乏を訴へた。」²⁵⁾さらに、震災支援のために自分の英書を売り500円を手にした。しかし、それでも足りなかったので『死線を越えて』などの印税などを財団法人の基本金としていたが、兵庫県知事に許可してもらい、基本金から5000円を引き出した²⁶⁾。これらの資金で大量の支援物資を購入し、賀川とイエス団の3人の若者は神戸から東京へ船で向かった。東京へ着いた賀川は本所と深川を調査し、賀川は救援拠点を本所の松倉町にすることに決め、10月19日アメリカ赤十字からもらったテントを設営したのが本所松倉町セツルメントの始めである²⁷⁾。

② 帝大セツルメント

10月、上野の山の救援も落ち着いた頃、末広巖太郎教授は学生リーダーの石島治志に次のように言った。「『賀川豊彦さんから、上野の救済は一応落ち着いたようだが、この冬の寒さを罹災者たちがどう過ごすか、それが心配だ。この冬も何とか続けてくれないか』との話があったが、どう思うかと言われました。そこで私が『学内、学外での活動で疲れました。それに秩序も回復して来ましたので、私共の仕事はもう終わったと思います。これからは市や区でやるべきだと思います。そろそろ三学期にもなりますので学窓に戻らねばなりません』と申しましたら、『そうか』と言われお別れしました。それから三日位たって先生から『賀川さんからまた話があったが、何とかならないか』と言われました。その先生の言葉のウラには、先生ご自身も強く望んでおられるように見受けられました。『それではこの冬だけではなく、いっそ永久的な学生の運動にし

たらどうでしょう。例えばトインビーのオックスフォード大学のセツルメントのような』と申しましたら、『そうだ、それがいい』と非常に喜んで下さいました。早速このことを皆に伝えましたら全員賛成。いよいよセツル運動に乗り出すことになりました。』²⁸⁾

震災直後から学生たちと共に活動してきた末広巖太郎について、賀川は「末広博士と會つたのは二十三日會の席上であつた。その日の討議は失業問題が中心であつたが一寸したことからバラツクの改造問題が話題に上つたが私と末広さんの意見が全然一致することになつた。それで十月二十日であつたと思ふ。二人で當局に打當つてみた。當局も決して我等の心配してゐることを無視してゐるわけではなかつた。我等もたゞ（原著には点あり）批評の爲めに批評したくはなかつた。それで喜んで君等の意見を聞かうと云ふこととなりそこで震災救護打合會なるものが産れた。」と記している²⁹⁾。また、賀川は末広教授がどのように活躍したか書いている。「末広巖太郎博士はあの小さい身體だが一然し體育でかためた身體で（先生が荷物自動車の上からボンボン飛ばれる勇氣には私も驚いて了つた）一生懸命に各方面のバラツクを心配して調査せられ遂に一燈園の松下君などを中心にして一燈園から十数名の人手を借り震災救護調査の常設的なものを最も科學的に行ひ救濟事務の交換局のやうなものを作ることが出来ることになつた。末広博士は自分で金を持って来て謄寫版を買ひ求められ備品を運び最も愉快的な奉仕振りを發揮せらるゝに到つた。』³⁰⁾

末広巖太郎も賀川を信頼していたようで、帝大セツルメントを開設する前、1924（大正13）年2月14日、東京帝国大学に賀川豊彦を講師として招いてセツルメント講演会を開催している。講演に先立って、末広教授が賀川豊彦の講師紹介をしたことが1924（大正13）年2月24日付の帝国大学新聞に掲載されている。

関東大震災後、被災者支援に関わっていた賀川豊彦と末広巖太郎が出会い、震災救護打合會ができ、そして賀川豊彦の言葉を末広教授が学生に伝えたことから帝大セツルメントの歩みが始まった。これは、第1代主事石島治志が感じていたように、賀川の言葉と、そして末広教授の熱い思い、穂積教授の温かい支援があったことが学生たちを帝大セツルメントへと突き動かしたと考えられる。

1923（大正12）年10月終わり頃～12月

① 賀川豊彦

10月終わりに、賀川一家は神戸から東京に引っ越した。そして神戸で共にセツルメント活動に携わってきた馬島憊医師や彼の妹も東京へ移った。賀川は本所の被災者が神戸と同じような問題をもっていると感じていたので、神戸と同じ方法、すなわち、セツル、住み込む方法を選択した。1909（明治42）年神戸神学校の学生であった賀川は、単身神戸のスラム街に住み込むことにより、貧しい人々の痛みや苦しみを理解することが出来た。本所においても被災者と共に住むことで被災者の痛みや苦しみが理解できると考えたのである。また、賀川は被災者が経済的に、そして精神的に自立することが重要と考えていた。本所の活動の中心となつたのは本所基督教産業青年会

である。1923（大正12）年10月19日に設立され、多くの活動部隊に分かれ、活動する。「宗教部、教育部、調査部、社会事業部、無料診療所・児童健康相談所、牛乳配給所、児童栄養食給与、体育部、低利事業資金貸金、組合事業部」などである³¹⁾。これらは人々の暮らしを立て直し、自立生活へと導くものとなった。

② 帝大セツルメント

トインビーホールのようなセツルメントを目指した学生たちは、12月14日「創立総会を開き、事業として成人教育部、調査部、児童部、医療部、法律相談部、市民図書館の六部を決定した。」³²⁾その後、託児所、労働学校、消費組合などが開設された。

1923（大正12）年から1924（大正13）年春にかけて

① 賀川豊彦

本所基督教産業青年会には全国から多くのボランティアが集まってきた。賀川は日本で最初にボランティア（賀川はボランチャーと記す）という言葉を使った人物である。ボランティアとして、イエスの友の会員や渡邊照子や大工の田中源太郎などが集まった。この頃、賀川は本所松倉町のセツルメントを運営するとともに、帝大セツルメント創設にも関わっている。1924（大正13）年2月14日賀川豊彦が、同年2月29日賀川と一緒に神戸の診療所で働いていた馬島医師が東京帝国大学に招かれ、セツルメント講演会をしている。賀川豊彦の講演会について、帝国大学新聞には「セツルメント・ウオークに就て實地にとりかかる前に充分なる知識を必要とすると云ふので斯界の経験者たる賀川豊彦氏を招いて十四日午後三時から工學部新館大講堂に於て講演會が開かれた。末広教授の紹介及び感想のあとを受けてピロードの背廣をピッタリ身につけて登壇」「此の事業の精神は全く人格的接觸の外なく極度の忍従犠牲克己を以て事に處する必要を説いたと掲載されている³³⁾。

② 帝大セツルメント

帝大セツルメントの総務部は土地を買うためにお金を用意した。そして、セツルメントハウスの建設については「バラック装飾社と考現学の主要メンバーであり、当時『尖塔社』という装飾美術グループを結成していた飛鳥哲雄を通じて、一九二四年二月に今和次郎へ帝大セツルメントハウスの設計が依頼された。四月に柳島元町の場所が決まると同時にハウスの建築を始め、二ヶ月あまりで完成している。」と記されている³⁴⁾。

1924（大正13）年春から夏にかけて

① 賀川豊彦

1924（大正13）年4月、賀川豊彦は帝国経済会議や中央職業紹介委員となり、関東大震災復興を支援した³⁵⁾。

② 帝大セツルメント

帝大セツルメントハウスが完成したのは1924（大正13）年6月10日である。「ハウス建築落成、

同日石島治志、中司文夫、服部之聡、東利久の四名、数日おくれて他の四名が住みこんだ。この日がセツルメント発足の日である³⁶⁾。」

本章では、賀川豊彦と帝大セツルメントの動きを時系列でみてきた。次の章では、賀川豊彦が設立した本所基督教産業青年会、東京帝国大学の学生たちが立ち上げた帝大セツルメントを、活動ごとに比較していきたい。

第3章 本所基督教産業青年会と帝大セツルメント

大きな被害を受けた東京市は将来を見据えた復興計画を考えていたが、国は復興予算を大幅に削減した。そのため、公的な復興支援は十分なものではなかった。震災後、困窮している被災者たちを支援したのが様々なボランティアな団体や組織である。賀川豊彦は本所松倉町において、東京帝国大学の学生たちは本所柳島において、セツルメントを始めた。両者とも震災後すぐ、被災者のために活動を始め、やがて組織化される。賀川は震災前から神戸で救霊団（のちにイエス団）を設立し、組織的に事業を展開していた。東京に拠点を移し、関東大震災の復興支援のために、1923（大正12）年12月本所基督教産業青年会を設立する。一方、東京帝国大学の学生たちは1924（大正13）年6月10日に大学拡張運動として帝大セツルメントを発足した。セツルメント成立過程について帝大セツルメント第2代主事の東利久は次のように述べている。「拡張運動が大学のセツルメントと名付けられ、又その形態となった事については、賀川豊彦氏のセツルメントの存在が影響を与えている。（中略）セツラーの間で事業内容について理論闘争が行われた。これには 1 社会調査と成人教育の二本の柱 2 賀川セツルメントの構造 3 イデオロギー の三点をめぐって論議された³⁷⁾。」東氏は、これらの結果決定された事業構成を賀川セツルメントと比較している³⁸⁾。

【東大セツルメント】

成人教育部・市民図書館

調査部

児童部

医療部

相談部

【賀川セツルメント】

キリスト教会

働く者の生産組合（キリスト教産業青年会）

貧しい者の消費組合

日曜学校

労働者診療所

人事相談所

さらに、東氏は「事業内容が決定した後も理論闘争は行われた。その結果生れた方針は 1 セツルメントは慈善事業にあらず。2 事業の対象は主としてプロレタリアであること」と記している³⁸⁾。

本章では、賀川セツルメントの拠点である本所基督教産業青年会と帝大セツルメントについて活動別に比較検討する。

1. 社会調査

a) 本所基督教産業青年会

賀川豊彦は当初から、バラックで暮らす人々を心配していた。彼らが東京の新しいスラム街の住人になるかもしれないと考えた。なぜならば、賀川は14年間神戸のスラム街でセツルメントを行った経験から、劣悪な住宅環境は人々の健康を害し、そして健康を害することで働けなくなり、その結果、貧困に陥るといふ悪循環を十分に知っていたからである。そのため、賀川は「屢々同志の者に依頼して此の焼けトタンの不良住宅がどう云つた形で變化しつゝあるかを調査して貰つた」と記している³⁹⁾。

b) 帝大セツルメント

帝大セツルメントの調査部について、1924（大正13）年9月中旬に、最初にして最も大規模でかつ精密な柳島元町の戸口調査が開始された。プランは「一、人に關するもの、二、職に關するもの、三、家に關するもの、と三つに分類し、ゲマインシヤフト、ゲゼルシヤフト、ランドシヤフトの相關ト係を見んとするもので、此れに依てセツルメント事業の根本方針を決定し、永久的政策を基礎づけんとする（セツラー第三號長屋氏記）意向のもとに、セツルメント全體の事業として各部の部員を總動員して此の調査に當つた」という⁴⁰⁾。そして、調査結果から、この地域は生活程度が低だけでなく、住民の多くが近年になって地方から移住してきた壮年労働者の家族であること、震災前後に地方の農民が都市へ殺到してどのように工業労働者になったかが明らかとなった。

帝大セツルメントの調査の中で、最も評価されたものが「焼失区域図の作成だった。中心になって働いたのは、医学部学生の林暲だ。工学部の林良材も協力し、一万分の一の地図を携え、二人で手分けして焼跡地を歩きまわり、そろそろ帰り始めた罹災者が住むバラック一軒一軒に立ち寄り、何時ごろ焼けたかを聞き質す。そこから火元を推測し、さらに气象台に九月一日から三日までの風向き・風速の変化を尋ねて資料を整理する。できあがっていくものの中に、屍体の集積地とその数を記入していく。その結果、九十数カ所の火元があったことが判明し、これは貴重な資料と注目されて、東京日日新聞社が買い上げ、『帝都大震火災系統地図』として出版される⁴¹⁾。」この地図を売ったお金が帝大セツルメントを始める時に貴重な資金となった。

2. 医療ケア

a) 本所基督教産業青年会

1923（大正12）年11月1日、「松倉町に組立バラックがたつた。そして神戸からきたドクトル馬島憐の一行が、無料診療をはじめた⁴²⁾。」馬島医師は、特に子どもの健康を心配し、牛乳や補助食品を子どもたちに与えた。

b) 帝大セツルメント

医療部について、1924（大正13）年11月医務室の夜間診療が開始された。開始前、林らセツラーたちは賀川豊彦を訪問して、色々援助を願い、種々の意見を仰いでいる。賀川のほかに彼らが

訪問したのは、林春雄医学部長、藍川廣重附属院長、医学部各教授、東京市衛生課長、賀川と神戸セツルメントで働いていた馬島医師たちである⁴³⁾。実際の診療は東京帝国大学の近藤外科教室が担当した。医療部の活動内容は、①7月に溝の消毒とチフス予防注射を行う。②医務室の開設としては、東京帝国大学の医師が診療し、診療費が安いので多くの患者がやってきた。③1925（大正14）年、医療部の学生たちは被災者の健常調査と医療費などの調査を行った。その結果、安価な診療が必要であることが明らかとなった。④日本で初めて「ケソン病」を発見した。⑤1925（大正14）年4月12日、一日無料診察が開かれた。⑥柳島にはトラコーマの患者が多く、洗眼が行われた。⑦学生と労働者は議会に請願書を送り、1931（昭和6年）労働者災害扶助法が制定された。これは日本における労災保険法の原点といわれる⁴⁴⁾。

3. 消費組合

a) 本所基督教産業青年会

本所基督教産業青年会は江東消費組合を1927（昭和2）年4月18日に設立する⁴⁵⁾。現在、賀川は「生協の父」と言われているが、それは1921（大正10）年神戸購買組合と灘購買組合の創設に関わり、イギリスのロッチデールをモデルとした日本で最初の消費組合を創設したことによる。賀川は東京においても消費組合が必要と考え、江東消費組合を創設する。この江東消費組合は、第二次大戦の時に建物が焼失したこと等で終了する。また、賀川は、1932（昭和7）年5月27日最初の協同組合診療所を新宿に開設している。新渡戸稲造と賀川豊彦がこの診療所を支援し、翌年、診療所は中野に移り、中野協同組合病院となった⁴⁶⁾。この病院は現在も継続している。

b) 帝大セツルメント

学生たちは関東大震災後、被災者支援を行ってきたが、被災者自らが生活改良する事こそ重要と考えるようになる。学生たちは「社会事業的の事業を我々は『無産者團自身の運動』として彼等の手に引移すと同時に、教化事業をより有効に実行せねばならなくなつた。而して消費組合は實にこ引継ぎの唯一最適の方法であり教化事業を遂行するにも甚だ有効な機関となり得る⁴⁷⁾。」と考えた。学生たちは労働者を支援し、1927（昭和2）年8月1日柳島消費組合を設立する。しかし、運営は難しく、1933年度以後の「消費組合部は部員欠乏の爲部自体の活動として見る可きものは殆どなく、遂に三四年末に至って廃止された⁴⁸⁾。」

4. 金融支援

a) 中ノ郷質庫組合

1928（昭和3）年6月14日、賀川は中ノ郷質庫組合を設立する。この仕組みは、被災者が質草を預け、低い金利でお金を借り、その日商売をし、その日銭で暮らす、そして余裕があれば質草を引き取る、もし期限内にお金が返せなくても質草は流れないというものであった。この仕組みについて、阿部志郎は「ユヌスさんの発想に近いと思いますけれども、困っている人に日銭の貸し付けをしました」と評価している⁴⁹⁾。ユヌスさんとは、ムハマド・ユヌス氏のことである。彼

は、バングラディッシュにおいて、グラミン銀行、貧困から脱出するために村の女性に少額の融資をする仕組みをつくり、それが評価され、ノーベル平和賞を受賞している。ユヌス氏は賀川豊彦献身100年記念の時に来日し、記念講演をしている。震災後設立した中ノ郷質庫組合は、現在「中ノ郷信用組合」と名称変更して、本所を中心に事業を継続している⁵⁰⁾。

b) 帝大セツルメント

該当なし

5. 法律相談

a) 本所基督教産業青年会

本所基督教産業青年会では法律相談が実施され、1923（大正12）年11月21日の神戸新聞には「法律の相談は三原法学士が引受けて呉れてゐます」と賀川が答えている記事が掲載されている⁵¹⁾。

b) 帝大セツルメント

帝大セツルメントには法学部の学生がおり、当初から法律相談部を作ることを計画していた。1924（大正13）年9月、法律相談所を開設した。「開設當時は人員も少く、宣傳もできず、毎週火木午後一時から九時までの時間、只空しく客を待つばかりだった⁵²⁾」という。その後、様々な工夫をし、相談者数は、大正13年度62人、14年度278人、15年度183人、昭和2年度155人、3年度126人、4年度290人、5年度320人、6年度294人、7年度122人、8年度132人、9年度129人、10年度105人、合計2,162人となっている⁵²⁾。

6. 成人教育

a) 本所基督教産業青年会

本所基督教産業青年会は編み物・裁縫・刺繍講習、英学院、図書室、文化講演など、積極的に成人教育事業を展開している⁵³⁾。

b) 帝大セツルメント

学生たちが力を注いだのが1924（大正13）年9月に始めた労働学校である。社会学者の清水幾太郎は、労働学校の講師経験を持つ。「テキストは、佐野学の『日本史』で、私は社会学と歴史とをチャンポンにしたような話をいたしました。（中略）みんな労働者で、私の父親に当るような年齢の人がいるかと思えば、私の兄、私の弟という年齢の人もいます。今は、それがみな私の生徒なのです。教えるに言えば、これほど教えるに生徒はないでしょう。しかし、誰一人、免状が欲しいという生徒はおりません、立身出世の便宜として来ている生徒もありません。むしろ来れば睨まれるのが関の山でしょう。それなのに、生活の疑問を解こうという熱意に燃えて、仕事に疲れた身体を夜の教室へ運んで来ているのです。そういう意味では、みんな真面目な純粋な生徒なのです。その後、私は方々の学校で教鞭をとることになりましたが、セツルメントほど真面目で純粋な生徒というものには接したことはありません。」と書いている⁵⁴⁾。しかし、

1926（大正15）年頃から労働学校は行詰っていく。「当時労資の対立は次第に激化し、労働運動は次第に困難な状況となり、労働者は当面どうすればよいか、の示唆を求めている。講義は概ね一般論であって行動の指針には物足りなく、自然に講師と生徒の意気が合わず、先ず講師の欠席が多くなり、次いで生徒の欠席も多くなり次第に沈滞に入った」という⁵⁵⁾。

7. 保育所

a) 本所基督教産業青年会

震災後、野外テントから始まった光の園保育所は、現在も「光の園保育学校」として続けている。場所は、震災後テントを設営した場所からすぐ近くの墨田区東駒形で、東駒形教会と本所賀川記念館も同じ建物内にあり保育活動を継続している⁵⁶⁾。

b) 帝大セツルメント

学生たちは、児童部に来ている子どもたちの親が共稼ぎであることに気づいた。そのような子どもたちは弟妹の世話をしなければならぬため、児童部になかなか参加できなかった。そこで、学生たちは保育所の設立を考え始める。しかし、資金がなく、困っていた。そんな時、宮内次官の関谷貞三郎が帝大セツルメントへ見学に来た。帰り際、第2代主事の東利久に対して「なんでもお手伝いしますから、なにかありますかと玄関に立って言われたから、じつは託児所を作りたいんですと言ったら、『ああ、そうですか』と言って帰られました。（中略）宮内省から役人がまわりまして、託児所を作りたいということですが、金がお要りじゃないですか、金が必要なら補助金を出しますから、申請書を出して下さいと言う。私の名前でもいいんですかと言うので、いいですと言うので、セツルメント主事の名で申請書を宮内省に出しましたところ当時四千五百円頂きました」と語っている⁵⁷⁾。1926（大正15）年4月託児所が開所される。

8. 子どものケア

a) 本所基督教産業青年会

賀川たちは、震災後すぐに、テントを使って、子どものケアを始める。深田種嗣は『宗教部日誌』の中で、1923（大正12）年10月20日本所松倉町の天幕が四つになったこと、付近の子供たちが手伝ってくれたこと、子供大将の泉爾一郎という11歳の少年が天幕に遊びに来たことなどを記している。また、10月21日松倉町で開いた日曜学校について「初めてなのに男児四十二名、女児三十六名も集まったことは喜ばしい」「夜テントにて宮原氏は児童のために慰め會を催して童話を話された。七〇名ばかりも集まり盛會だった」と記している。また、賀川らは子どもの散髪や入浴サービスも実施している。11月14日の日誌に「向ひの横川小学校の校長等があまりに児童の宗教的なることを警戒してゐるとか。笑止なことだ」と書いている⁵⁸⁾。賀川たちの支援活動はキリスト教を基盤とし、主に日曜学校という形で子どものケアを行っていた。

b) 帝大セツルメント

学生たちは児童部の内容を工夫した。第一に、子どもの施設として、運動器具や子供用の本を

用意した。第二に、話の会を開いた。第三に、有名な声楽家の関鑑子さんを招いた。関さんは唱歌を教えた。第四に、ピクニックを催し、夏休みには臨海学校や林間学校を開設した。第五に、学生は新しいスタイルの募金を計画した。十銭袋である。東大生や市内の各女子学校などが一人十銭の募金を行った。このお金は臨海学校などに使われた。この新しい募金方法はうまくいった。これはセツルメントの発案と一般に言われた⁵⁹⁾。1924（大正13）年11月24日付の帝国大学新聞には音楽を教授する関（原文のまま）鑑子女史の写真と記事が掲載されている⁶⁰⁾。

9. 宗教的活動

a) 本所基督教産業青年会

本所基督教産業青年会は、日曜学校、朝と夕の礼拝、祈りの会、聖書クラスなどを行っていた。これらの活動は現在、日本基督教団東駒形教会において継続されている⁶¹⁾。

b) 帝大セツルメント

帝大セツルメントは国立大学の学生たちの組織であり、宗教を基盤にしていない。『法律時報』1973年8月号の座談会において、穂積重遠教授の「徳は孤ならず、必ず隣あり」という論語の言葉が取り上げられている⁶²⁾。穂積教授は、「私は事有る毎に論語をひもとくこと、恰もクリスチャンのバイブルに於けるが如くである。この小文の筆を擱くに當り、手に随ひ巻を開いて忽ち『不徳孤。必有隣。』の語を獲た正にセツルメントの標語たるべし。敢てセツルメントによつて隣保を徳化するとは言はぬ。願くは隣保との親交によつてセツルメント自身を徳化せん哉」と記している⁶³⁾。穂積教授はキリスト教のバイブルではなく論語の言葉を帝大セツルメントの標語として考えていた。

本章では、活動ごとに、本所基督教産業青年会と帝大セツルメントを比較してきた。次の章では、賀川豊彦の支援活動と帝大セツルメントの特徴を比較分析する。

第4章 賀川豊彦の支援活動と帝大セツルメントの特徴

1. 関東大震災までの支援経験

関東大震災における賀川の活動の特徴は「即戦力」である。14年間神戸スラム街で支援活動をしていた。布川弘は、賀川の神戸スラム街支援について、それまでの日本の慈善事業とまったく異なったものと評価している。第一に、「スラム住民の家庭生活の確立を目標とした総合的生活改善事業」である。第二に、「それまではあくまでも『施し』の対象でしかなかった労働能力に恵まれない人々を、同じ人格をもつものとして救済対象にしたこと」である。第三に、「対話による心理の研究という新しい方法を導入したこと」である。布川弘は、賀川の活動の根底には、「全ての人々に平等な人格が存在するという人格尊重の信念があった」と指摘する⁶⁴⁾。

神戸の救霊団（のちにイエス団）で提供していた活動は、①安料理（無料給飯）、②無賃宿所

(無料宿泊所)、③子供預所(貧児の家庭招待家庭感化避暑)、④資本無利子貸与(生活費支持)、⑤医療施設(病者保護)、⑥葬式部(無料葬式執行)、⑦雇入部入口(職業紹介)、⑧日曜学校(伝道)、⑨子ども理髪・入浴、⑩慰安部(避暑慰安旅行慰安会)、⑪日曜説教・水曜祈祷会(伝道)である⁶⁵⁾。これらの活動は、本所松倉町のセツルメント活動の基礎となっている。

一方、帝大セツルメントの学生たちは関東大震災まで支援経験がなかった。しかし、学生たちは学生らしく、大学で学んだアカデミックな知識や技術を活用し、支援活動を行っていく。次に、それぞれの活動の特徴をみていきたい。

2. 活動の特徴

まず対応の早さについて、震災が起こった後、賀川の対応は素早かった。賀川はすぐに神戸から東京へ駆けつけ、被災地の状況を調べ、被災者のニーズが何か調査した。一方、東京帝国大学の学生たちも船を降りるとすぐに大学へもどり、被災者支援を始めた。また、学生たちも被災者の状況やニーズを調査することが重要と考えた。

次に、資金調達について、賀川は西日本中を回って講演会を開き、資金を集め、また自分の英書売り財団基金の一部も使い、支援物資を購入した。一方、学生たちは、被災地の焼失状況を調査しその精度の高い地図を売ることによって資金を確保し、また帆布を売ったお金、穂積教授と末広教授の幅広い人脈で集めた寄付などが資金となった。

活動方針について、賀川は神戸スラム街での活動と同じように被災地に住み込む、セツルメントという方法をとった。一方、東京帝国大学の学生たちもイギリスのトインビーホールのようなセツルメントを目指した。

宗教的基盤について、賀川は社会改良家である前に牧師であり、宗教を基盤としている。一方、東京帝国大学の学生たちは宗教を基盤にしていない。具体的にいうと、賀川は身体的ニーズに対応するために、無料診療所を開設した。社会的ニーズに対しては法律相談や消費組合の設立、光の園保育園などで対応した。精神的ニーズに対しては相談所等を準備した。そして、霊的ニーズに対しては日曜学校や日曜礼拝などを準備していた。一方、東京帝国大学の学生たちは身体的ニーズに対しては低価格の診療所を準備した。社会的ニーズには法律相談所や柳島消費組合、託児所などを準備していた。精神的ニーズには心理的支援をした。しかし、霊的ニーズに対応していない。

協同組合について、賀川は困窮している被災者にとって協同組合が重要だと考えた。安くて良い品物が手に入る江東消費組合や低い利子でお金を貸してくれる中ノ郷質庫信用組合や医療協同組合として中野組合病院を設立した。一方、東京帝国大学の学生たちも消費組合の仕組みが被災者にとって効果的と考え、柳島消費組合を創設している。

最後に、継続性について、帝大セツルメントは、1924(大正13)年6月10日の設立以来、その活動は順調であった。しかし、日本の労働組合が激化するに従い、帝大セツルメントの労働学校で学ぶ生徒たちは組合員として過激に活動するようになった。また、日中戦争の始まりによって、

日本政府が軍国化を推し進め、1938（昭和13）年国家総動員法が制定された年、帝大セツルメントは文部・内務当局の弾圧により自発的閉鎖に至る⁶⁶。学生たちの活動は終わった。しかし、帝大セツルメントを通して多くの経験をし、現実の経済学や社会学を学び、社会人として日本の様々な分野で活躍している。一方、賀川の復興支援は現在まで100年近く継続している。

第5章では、なぜ賀川らの活動が続いているのか、考察する。

第5章 なぜ賀川豊彦の復興支援は100年近く継続しているのか

なぜ賀川の活動は100年近く続いているのか、賀川豊彦の復興支援と帝大セツルメントを継続性という視点から分析する。

第一に、組織について見ていきたい。帝大セツルメントは国立大学の学生による活動であり、学生が所属する帝国大学は国の管轄である。組織として国の方針に逆らうことはできなかった。当時の日本は日中戦争の拡大により戦時統制が強まり、1938（昭和13）年国家総動員法が制定された時期である。学生や教授たちは「大学隣保館」に変更するなど工夫し、なんとか継続しようと努めたが、国の圧力に従うしかなく、1938（昭和13）年2月帝大セツルメントは自発的閉鎖となった。一方、賀川の組織はボランタリーなものから始まっている。最初、1909（明治42）年神学生だった賀川豊彦が単身、神戸のスラム街に住み込んだことから始まり、関東大震災後は東京に拠点を移す。1938（昭和13）年制定された国家総動員法は賀川たちにも影響しており、同年東京の雲柱社は財団法人として認可されている。第二次大戦後、雲柱社は社会福祉法人となり、現在も福祉事業を継続している。

第二に、全人的ケアについて考えたい。全人的ケアとは、身体的、精神的、社会的、霊的ニーズを充足することである。帝大セツルメントの学生たちは宗教を基盤にしていなかったので霊的ケアを実施していない。一方、賀川は社会改良家である前に牧師である。賀川にとって大切なことは「神を愛し、隣人を愛する」という聖書の教えであった。そのために、全人的ケア、つまり身体的、精神的、社会的、霊的ニーズを充足することを大切にし、賀川が行う救援活動の中には霊的ケアが含まれていた。WHOは1998（平成10）年、健康を身体的、精神的、社会的、霊的な側面から再定義しようとした⁶⁷。現在、ホスピスケアや緩和ケアの分野では、ガン末期患者の身体的、精神的、社会的、霊的痛みを緩和する全人的ケアがグローバル・スタンダードになっている。賀川は現在でいうところの全人的ケアに近いものを目指していたと言えよう。

第三に、宗教的基盤について考えてみたい。東京帝国大学は国立大学であり、宗教的基盤はない。しかし、先に述べたように穂積教授はセツルメントの標語として、論語の「徳は孤ならず、必ず隣あり」という言葉を考えていた。これは、徳のある人は孤立化することがなく、必ず良い協力者にめぐまれるという意味である。穂積教授を知る学生たちは穂積教授のことを春風のように周りを穏やかにする人だったという。穂積教授は、帝国大学の学生が被災者を救ってやるというような一方的な思いでなく、活動の中で多くの人々と協力しセツルメントを進めることが重要

と考えていた。また、もう一人の支援者である末広巖太郎教授は「大学拡張運動」という考えの下、当時大学で学ぶ学生は恵まれた者であり、そのような貴重な機会を得ている学生は大学で学んだアカデミックな知識や技術を社会に広めることが使命と考えていた。しかし、順調に発展していた帝大セツルメントは、1938（昭和13）年国の圧力により自発的閉鎖となった。一方、本所基督教産業青年会は賀川豊彦はじめキリスト教関係者たちが中心となっており、宗教的基盤に基づいて活動していた。賀川が好んでいた言葉に「雲の柱」という言葉がある。これは旧約聖書でイスラエルの民がエジプトから脱出する時、「雲の柱」によって行く道を神が示すと約束したことに由来する。賀川は神が導く「雲の柱」に従い、活動し、そして、賀川の考えに賛同して多くの人たちが協力した。共に活動している仲間たちの多くも「神を愛し、隣人を愛する」ために実践していた。しかし、かといって、賀川たちの活動はキリスト教関係者に限定するものではない。神戸においても東京においても、賀川は市町村や都道府県など行政と連携した事業が多い。特に、関東大震災以降、賀川は国の審議会の委員に委嘱され、全国的に展開する事業に携わる。第二次大戦中は、反戦思想を持つとして賀川は逮捕され憲兵に監視されていた時期もあるが、終戦後すぐに賀川の世界的人脈や英語力のゆえに東久邇宮内閣の参与として総理直々に頼まれ、戦後の復興に尽力する。賀川はキリスト教の牧師であると共にこのような社会事業の実績を持っていた事も事業継続できた要因と考えられる。

第四に、経済的基盤である。東京帝国大学の学生たちはセツルメントを始める際、焼失地区図を売ったお金、帆布を売ったお金、そして穂積教授や末広教授の人脈で集まった寄付などを資金とした。その活動が進むにしたがい、帝大セツルメントは評価が高まり、宮内省などからも援助を受けている。しかし、1938（昭和13）年国の圧力により自発的閉鎖となり、活動を終了する。一方、賀川豊彦は関東大震災の前から神戸で社会事業を運営しており、1922（大正11）年7月神戸のイエス団は財団法人として認可され、1938（昭和13）年国家総動員法が成立した年には東京の雲柱社が財団法人として認可されている。後藤美緒は「1920年代から1930年代にかけての戦間期は、大正デモクラシーの風潮のもと、政治の平等や生存権をめぐる人々の意識が高まり、制度整備が進んだ時期であった。その動きは今日から判断すれば限定的なものであり、社会的連帯を原理としていた。その一方で、そうした連帯の原理は、1938年の厚生省の創設に代表されるように、国家体制に回収されていくことになった。その事例として、同年、国家総動員法、国民健康保険法、社会事業法が公布され、人々の身体と生命を管理する法整備が進んだ。」と書いている⁶⁸。賀川の福祉施設は社会事業法の対象となった。しかし、本所基督教産業青年会はその対象でないものを含み事業継続が難しかった。賀川は経済的理由から本所基督教産業青年会の解散を考えたことがある。しかし、その時、職員たちが自らほかの勤め口を探し、その給料を寄付し、本所基督教産業青年会は維持された。著名な社会福祉事業家である生江孝之は内務省の役人であった時に、本所基督教産業青年会を訪れ、「どうしてそれだけの人間に食はずことが出来るか」と驚いたそうである⁶⁹。賀川は『死線を越えて』がベストセラーになり多額な印税を手にしてしたが、1930～40年代反戦思想を持つとして、政府から執筆を禁止されていた。そのため、本所基

督教産業青年会を支援することが難しく、イエスの友の会員たちに寄付依頼している。第二次大戦中、賀川が関係する東京と関西にあるほとんどの福祉施設が空襲によって焼失したが、戦後、賀川はそれらを再建し、現在、関東では社会福祉法人「雲柱社」、関西では社会福祉法人「イエス団」によって、幅広い社会福祉事業が展開されている⁷⁰⁾。

まとめ

賀川の復興支援と帝大セツルメントを比較検討することで、両者の関係や特徴が明らかとなった。そして、関東大震災から現在まで100年近く続いている賀川の復興支援の特徴が明らかとなってきた。第一に、賀川は地方自治体や国、そしてほかのボランティア組織や団体と協力し活動を進めている。また、賀川は被災地を調査し、その結果に基づき、支援計画や方針を決めている。第二に、賀川は身体的、精神的、社会的、霊的ケアを含んだ全人的ケアを試みている。全人的ケアは震災によって傷ついた人々を癒し、回復させ、また希望を与えている。第三に、宗教的基盤であるが、賀川や仲間たちは「神を愛し、隣人を愛する」という聖書の教えを基本として活動を展開してきた。しかし、それらの活動はキリスト教関係者にとどまるものではなく、行政や他の団体と連携するものであった。第四に経済的基盤である。賀川は関東大震災の前から神戸で社会事業を14年間運営しており、本所松倉町のセツルメントは神戸で実践してきたものを基本とし、経営方法についても様々な経験をもっていた。1938（昭和13）年国家総動員法が制定された時、東京の雲柱社は財団法人に認可され、戦後は社会福祉法人となって事業を発展している。

本稿は、賀川豊彦の復興支援と帝大セツルメントの支援活動を時系列に、また活動内容ごとに比較することで、両者の関係や活動の特徴を明らかにしてきた。帝大セツルメントは1938（昭和13）年2月、国の圧力により自発的閉鎖となったが、賀川の活動は現在まで100年近く継続している。両者を比較することで、継続の要因が明らかとなった。賀川の活動は、1995（平成7）年阪神淡路大震災や2011（平成23）年東日本大震災の際にも人々の心に思い起こされ、人々を勇気づけた。今回は、賀川豊彦の活動が阪神淡路大震災の時にどのように影響を与えたのか、研究を進めていきたい。

引用文献

- 1) 賀川豊彦「焦土を彩色せんとして」『地球を墳墓として』アテネ書院、大正13年、95頁。
- 2) 石島治志「セツルメント懐古」福島正夫ら編『回想の東京帝大セツルメント』日本評論社、1984年、61～62頁。
- 3) 加藤雍太郎ら『横綱町公園～東京都慰霊堂・復興記念館』東京都公園協会、2009年、57頁。
- 4) 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会編『1923関東大震災報告書（第2編）』中央防災会議、平成20年3月、2頁。
- 5) 諸井孝文・武村雅之「第1章第1節地震の発生と被害規模」中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会編『1923関東地震報告書（第1編）』中央防災会議、平成18年7月、2頁。
- 6) 賀川豊彦「震災救護運動を顧みて」『太陽』大正13年9月号、215頁。

- 7) 武藤富男『評伝賀川豊彦』キリスト新聞社、1981年、342頁。
- 8) 賀川豊彦「灰燼の中に座して」『地球を墳墓として』アテネ書院、大正13年、76頁。
- 9) 横山春一『賀川豊彦伝』警醒社、1959年、199頁。
- 10) 「春子夫人の災害地への慰問」三原容子編『賀川ハル史料集第2巻』緑陰書房、2009年、60頁。
- 11) 石島治志、前掲書、56～57頁。
- 12) 賀川豊彦「灰燼の中に座して」、前掲書、76～77頁。
- 13) 福島正夫・川島武宣編『穂積・末広両先生とセツルメント』東京大学セツルメント法律相談部、1963年、19～20頁。
- 14) 賀川豊彦「灰燼の中に座して」、前掲書、80頁。
- 15) 賀川豊彦「灰燼の中に座して」、前掲書、83頁。
- 16) 奈良常五郎『日本YMCA史』日本YMCA同盟、1959年、237頁。
- 17) 賀川豊彦「灰燼の中に座して」、前掲書、86頁。
- 18) 賀川豊彦「灰燼の中に座して」、前掲書、89～91頁。
- 19) 石島治志、前掲書、57頁。
- 20) 賀川豊彦「灰燼の中に座して」、前掲書、92頁。
- 21) 賀川豊彦「焦土を彩色せんとして」、前掲書、94頁。
- 22) 賀川豊彦記念・鳴門友愛会研究部編『阿波牧舎』vol.11、2014年、23頁。
- 23) 福島正夫・川島武宣編、前掲書、20頁。
- 24) 福島正夫・川島武宣編、前掲書、80頁。
- 25) 賀川豊彦「焦土を彩色せんとして」、前掲書、94頁。
- 26) 賀川豊彦『石の枕を立てて』実業之日本社、昭和14年、27頁。
- 27) 「座談会」『雲の柱』第2号、1984年、28頁の中で、本所賀川記念館理事長の雨宮延幸氏が、賀川豊彦「焦土を彩色して」『地球を墳墓として』の中で10月18日と書いているが、10月19日金曜日であったことを述べている。
- 28) 石島治志、前掲書、58頁。
- 29) 賀川豊彦「焦土を彩色にせんとして」、前掲書、107頁。
- 30) 賀川豊彦「焦土を彩色にせんとして」、前掲書、107～108頁。
- 31) 杉浦秀典「日本における戦前・戦後の社会事業～賀川豊彦を中心として」『都市問題』第100巻第7号、2009年7月、91頁。
- 32) 東利久「東大セツルメントの生い立ち」福島正夫ら編『回想の東京帝大セツルメント』日本評論社、1984年、63頁。
- 33) 『帝国大学新聞』大正13年2月24日付。
- 34) 藤田治彦編『芸術と福祉—アーティストとしての人間』大阪大学出版会、2009年、183頁。
- 35) 賀川記念館ホームページ、<http://core100.net/tk/prof.html>、2019年3月1日検索。
- 36) 福島正夫「一 東京帝大セツルメントの前史と創立」福島正夫ら編『回想の東京帝大セツルメント』、日本評論社、1984年、6頁。
- 37) 滋賀秀俊編『東京帝大柳島セツルメント医療部史』新日本医学出版社、昭和54年、176～77頁。
- 38) 滋賀秀俊編、前掲書、178-179頁。
- 39) 賀川豊彦「震災救護運動を顧みて」、前掲書、218頁。
- 40) 大森敏雄編『東京帝国大学セツルメント十二年史』久山社、1998年、120～121頁。
- 41) 宮田親平『だれが風を見たでしょう～ボランティアの原点・東大セツルメント物語』文芸春秋、1995年、15～16頁。
- 42) 横山春一、前掲書、207頁。
- 43) 大森敏雄編、前掲書、130頁。
- 44) 福島正夫・川島武宣編、前掲書、70～71頁。
- 45) 賀川記念館ホームページ、<http://core100.net/works/works03.html>、2019年3月3日検索。

- 46) 中野総合病院ホームページ、<http://www.nakanosogo.or.jp/introduction/history/>、2019年3月3日検索。
- 47) 「消費組合部史」大森敏雄編『東京帝国大学セツルメント十二年史』久山社、1998年、208頁。
- 48) 福島正夫・川島武宣編、前掲書、開始については72頁、廃止については451頁。
- 49) 阿部志郎「震災とコミュニティー」賀川豊彦献身100年記念事業実行委員会編『Think Kagawa ともに生きる』賀川豊彦記念・松沢資料館、2010年、13頁。
- 50) 中ノ郷信用組合ホームページ、<http://www.nakanogou.shinkumi.co.jp/gaiyou.html>、2019年3月1日検索。
- 51) 「東京罹災民救護」『神戸新聞』1923（大正12）年11月21日付。
- 52) 大森敏雄編、前掲書、142頁。相談者数については145頁の表を参照。
- 53) 杉浦秀則、前掲書、91頁。
- 54) 清水幾太郎『清水幾太郎 「私の心の遍歴」』日本図書センター、2012年、148頁。
- 55) 福島正夫・川島武宣編、前掲書、67頁。
- 56) 光の園保育学校ホームページ、<http://fukushi.unchusha.com/hikarinosono/>、2019年3月3日検索。
- 57) 福島正夫・川島武宣編、前掲書、31頁。
- 58) 深田種嗣「宗教部日誌」『賀川豊彦研究』第58号、2012。10月20日については87頁、10月21日については87～88頁、11月14日については97頁。
- 59) 福島正夫・川島武宣編、前掲書、67頁。
- 60) 『帝国大学新聞』1924（大正13）年11月24日付。
- 61) 本所賀川記念館ホームページ、<https://www.honjokagawakinenkan.or.jp/about/>、2019年3月3日検索。
- 62) 『法律時報』1973年8月号、109頁。
- 63) 大森敏雄編、前掲書、3頁。
- 64) 布川弘「神戸スラム改善事業と関東大震災救護活動の比較」『雲の柱』第12号、1995年、1～2頁。
- 65) 杉浦秀則、前掲書、87頁。
- 66) 『帝国大学新聞』昭和13年2月7日付。
- 67) WHOホームページ、<https://www.japan-who.or.jp/commodity/kenko.html>、2019年3月1日検索。
- 68) 後藤美緒「戦間期日本における『社会医学』の理念と『社会事業』の構想—東京帝大セツルメントの活動を通して」『年報社会学論集』27号、2014年、62頁。
- 69) 賀川豊彦「松倉町のバラックより」『雲の柱』1月号、1924（大正13）年、190頁。
- 70) 雲柱社ホームページ、http://fukushi.unchusha.com/unchusha_map.html、2019年3月3日検索。

受理日 2019年5月21日